

雌雉香炉

この陶器は、17 世紀、陶芸家・野々村仁清が制作した雉香の形をした炉である。雌は雄と同様、上絵付けの技法に優れ、造形も巧みである。これらの才能は、京焼の大成者としての名声を確固たるものにした。京焼は京都で生まれ、武家階級を対象とした絵付け陶器の様式である。

仁清の優美な作品は、茶の湯や茶道具として大いに好まれた。実際、今も残っている京焼の初期の作品の多くは、この雄雉香炉を含む茶道具である。通常、茶会の席では、亭主が床の間に季節の飾りを置くのが一般的である。雉は伝統的に春に関連付けられているため、この香炉は春の集まりで使われ、部屋に香りを漂わせ、季節感を演出したのであろう。

雉の雌は、雄に比べ色彩が乏しい。雄は相手を引きつけるために派手な色に進化した一方、雌は捕食者を避けるために地面に溶け込むような模様に進化した。仁清は、窯の中で酸化した銀の絵の具で黒や茶のグラデーションを作り、雌雉の地味な色調を忠実に再現している。しかし、頭部には、赤と金の肉垂と、まぶたのあたりにほんの少し青を入れるなどの工夫がされている。また、雌の方は後頭部から羽毛のような耳が角のように突き出ている。肉垂も耳も雄の雉にしか見られないため、その存在にはさまざまな説がある。仁清は雄の雉をモデルにし、また雄と雌で全体の色調が変わることは知っていたが、雌の頭部が異なることまでは知らなかったのだろうという説。また、雉の雌は実はもう一羽の雄で、雄が影になっている「夜雉」であるという説もある。

窯の中では、粘土が縮んだり動いたりするので、複雑な形を作るには熟練の技が必要である。尾は 45 度に突き出し、首は背中に向かって滑らかな弧を描き、まるで羽毛を整えるなど、雉の体の造形は高度な習熟度を示している。東アジアの絵画では、このような姿勢は雌雄を識別するために用いられている。

仁清は、その技術によって、国内でも最も需要のある職人の一人となった。また、仁清は、陶芸家として初めて作者を特定できるサインのような印、「陶印」を作品に施した陶芸家の一人である。このマークは、陶芸家が無名の労働者ではなく、一人の芸術家として認知されるようになったことを意味する。この作品の底面には、仁清の陶印が入っている。

この雌雉香炉は 1960 年に重要文化財に指定された。この香炉は「雄雉香炉」とともに常設展示されている。